■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

16　伊藤徹「神々の永遠の争い」

■目標　本文に直接書かれていない内容を想定しつつ読む。

■追跡

①　与えられた困難を人間の力で解決しようとして営まれるテクノロジーには、問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発によって解決しようとするというかたちで自己展開していく傾向が、本質的に宿っているように私には思われる。科学技術によって産み落とされた環境破壊が、それを取り戻すために、新たな技術を要請するといった事例は、およそ枚挙にいとまないし、感染防止のためのワクチンに対してウィルスが耐性を備えるようになり、新たな開発を強いられるといったことは、毎冬のように耳にする話である。東日本大震災の直後稼働を停止した浜岡原発に対して、中部電力が海抜二二メートルの防波堤を築くことによって、「安全審査」を受けようとしているというニュースに接したときも、同じ思いがリフレインするとともに、こうした展開に果たして終わりがあるのだろうかという気がした。技術開発の展開が無限に続くとは、たしかにいい切れない。次のステージになにが起こるのか、当の専門家自身が予測不可能なのだから、先のことは誰にも見えないというべきだろう。けれども科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわせず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある。いったいそれはなんであり、世界と人間とのどういった関係に由来するのだろうか。

問いの確認。あげられている例は、いわゆる「マッチポンプ」っていうやつやね。マッチポンプとは、自分で問題を起こしておき、自ら解決することで賞賛や利益を得ること。自分でマッチで火をつけておいて、ポンプを持ってきて水をかけ、「おれが消火したぞ！」っていうやつです。思えば、技術とはそういうものの連鎖なのかもしれない。自動車があるから、交通事故っていうものが起きるわけだが、事故を前提として、それを防ぐための自動運転技術、が開発されたりする。

筆者の問題意識は、傍線部、「科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわせず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある。いったいそれはなんであり、世界と人間とのどういった関係に由来するのだろうか」。

自動車、やーめた、という選択肢をとってもよさそうなものだが、そうはならない。どうにも止まらない！　なんで？　どこまで行くんだよ？

②　医療技術の発展は、たとえば不妊という状態を、技術的克服の課題とみなし、人工授精という技術を開発してきた。その一つ体外受精の場合、受精卵着床の確率を上げるために、排卵誘発剤を用い複数の卵子を採取し受精させたうえで子宮内に戻す、といったことが行われてきたが、これによって多胎妊娠の可能性も高くなった。多胎妊娠は、母体へのフィジカルな影響や出産後の経済的なことなど、さまざまな負担を患者に強いるため、現在は子宮内に戻す受精卵の数を制限するようになっている。だが、この制限によっても多胎の「リスク」は、自然妊娠の二倍と、なお完全にコントロールできたわけではないし、複数の受精卵からの選択、また選択されなかった「もの」の「処理」などの問題は、依然として残る。

人工授精（体外受精）という技術とそのリスク。

③　いずれにせよ、こうした問題に関わる是非の判断は、技術そのものによって解決できる次元には属していない。体外受精に比してより身近に起こっている延命措置の問題。たとえば胃瘻などは、マスコミもとりあげ関心を惹くようになったが、もはや自ら食事をとれなくなった老人に対して、胃に穴をあけるまでしなくても、鼻からチューブを通して直接栄養を胃に流し込むことは、かなり普通に行われている。このような措置が、ほんのその一部でしかない延命に関する技術の進展は、以前なら死んでいたはずの人間の生命を救済し、多数の療養型医療施設を生み出すに到っている。

延命措置の技術とそれが生み出す問題。

④　しかしながら老齢の人間の生命をできるだけ長く引き延ばすということは、可能性としては現代の医療技術から出てくるが、現実化すべきかどうかとなると、その判断は別なカテゴリーに属す。「できる」ということが、そのまま「すべき」にならないのは、核爆弾の技術をもつことが、その使用を是認することにならないのと一般である。テクネー（τέχνη）である技術は、ドイツ語Kunstの語源が示す通り、「できること（können）」の世界に属すものであって、「すべきこと（sollen）」とは区別されねばならない。

「できる」からといって、「すべき」か、または、「していい」か、は別の問題。技術を巡る根本問題だ。

⑤　テクノロジーは、本質的に「一定の条件が与えられたときに、それに応じた結果が生ずる」という知識の集合体である。すなわち、「どうすればできるのか」についての知識、ハウ・トゥーの知識だといってよい。それは、結果として出てくるものが望ましいかどうかに関する知識、それを統御する目的に関する知識ではないし、またそれとは無縁でなければならない。その限りのところでは、テクノロジーは、ニュートラルな道具だと、いえなくもない。ところが、こうして「すべきこと」から離れているところに、それが単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由もある。

技術は、「すべき／すべきでない」という判断とは無縁（ニュートラル）だからこそ、無縁でいられない。どういうことだろう？

⑥　テクノロジーは、実行の可能性を示すところまで人間を導くだけで、そこに**読解問題1**行為者としての人間を放擲するのであり、放擲された人間は、かつてはなしえなかったがゆえに、問われることもなかった問題に、しかも決断せざるをえない行為者として直面する。

「放擲」。「抛擲」とも書く。「ほうてき」。投げ出すこと。

読解問題1　「行為者としての人間を放擲する」とはどのようなことか。

それだけ読んでもよく意味のわからない語句を、前後を補って説明する問題。**☆傍線部延長術**。結局、一文全体＝形式段落全体を言い換える問いだ。技術が主語になっているから、一種の擬人法になってるね。

技術は、その技術が実行できる状態になったところで自分の役目は完了する。実際にそれを実行するかどうかは、人間に任されていて、技術自身は関与しない。人間は、技術に置いて行かれるわけだ。置いて行かれた人間は、技術の知識とは別の次元で、一人で実行するかどうかを決断しなければならない。しかも、新技術が可能にしたことによって、初めて考えなければならなくなった問題に向き合わなくてはならない。

答案の組み立て方だが、まず、①主述を補うのが基本。次に、②パートに分けて言い換える（**☆切り身の方法**）。

①技術は、（それが実行可能になった時点で）行為者としての人間を放擲する、ということ。

②技術は、（それが実行可能になった時点で）行為者としての人間を／放擲する、ということ。

→【解答例1】技術は、それが実行可能になった時点で、その技術を実行するかどうかの判断を人間に任せ、自らは関与しない、ということ。

物足りないのは、「じゃ、それじゃあ、僕が判断するよ」という感じで、単に役割が交代する、という印象の答案にも見えることだ。元の文章には、技術は、人間を引きずるだけ引きずっていって、難問に直面させた上で、どこかに行っちゃう、っていう含意がある。技術のせいで、考えなくてもよかった問題を考えさせられる。筆者が初めにいっていた「有無をいわせず人間をどこまでも牽引していく技術の不気味さ」を入れたいところ。

【解答例2】技術は、それが実行可能になった時点で、実行するかどうかの判断に自らは関与せず、人間だけに、その技術のために生じた新たな問題の決断を強いる、ということ。

元の「擬人法」構文を解体して、「人間がこうさせられるということ」といった形で書いてもいい。

【解答例3】人間は、新しい技術が使えるようになったとき、その技術によって生まれる問題に向き合い、実行の是非を判断しなければならないが、そのとき技術の知識自体は判断の根拠にならないということ。

答案はいろいろに組み立てられるけれども、あくまで「技術は行為者としての人間を放擲する」の言い換えとして対応できているかを常に念頭に置いておかなければならない。

⑦　妊婦の血液検査によって胎児の染色体異常を発見する技術には、そのまま妊娠を続けるべきか、中絶すべきかという判断の是非を決めることはできないが、その技術と出会い行使した妊婦は、いずれかを選び取らざるをえない。いわゆる「新型出生前診断」が二〇一三年四月に導入されて以来一年の間に、追加の羊水検査で異常が認められた妊婦の九七％が中絶を選んだという。

これも直面したときには、たいへん深い問題を生んでしまう技術だ。一般的に行われる検査になりつつあるが、自分の問題として突きつけられたときの衝撃は、察するにあまりある。知らなければ、問われなかった決断。

⑧　療養型医療施設における胃瘻や経管栄養が前提としている生命の可能な限りの延長は、否定しがたいものだし、それを入所条件として掲げる施設があることも、私自身経験して知っている。だが、飢えて死んでいく子供たちが世界に数えきれないほど存在している現実を前にするならば、自ら食事をとることができなくなった老人の生命を、公的資金の投入まで行って維持していくことが、社会的正義にかなうかどうか、少なくとも私自身は躊躇なく判断することができない。

かといって、筆者にも、私たちにも、その管を抜いてしまうという行為に及ぶことはできないはずだ。老人は死ね、という思想は、障がい者を非生産的だとする発想とつながるかもしれない。ことはそう簡単に割り切れない。余談。この例で、老人の命と子どもの命を排反するもののようにセッティングしているが、これは問いの立て方として適切とは言えない。が、私たちはよくこの手の問いを立ててしまう。飢えをいかになくすかという問いと、人間がいかに豊かに最期を迎えるかという問いは、それぞれに両立する。

⑨　ここで判断の是非を問題にしようというのでは、もちろんないし、選択的妊娠中絶の問題一つをとってみても、最終的な決定基準があるなどとは思えない。むしろ肯定・否定を問わず、いかなる論理をもってきても、それを基礎づけるものが欠けていること、そう

いう意味で実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだと、私は考えている。

技術から人間に預けられた判断、決断。しかし、そのための確かな根拠はない、というのが筆者の考えのようだ。

⑩ たとえば現世代の化石燃料の消費を将来世代への責任によって制限しようとする論理は、物語としては理解できるが、現在存在しないものに対する責任など、応答の相手がいないという点で、想像力の産物でしかないといわざるをえない。同じ想像力を別方向に向ければ、そもそも人類の存続などといったことが、この生物種に宿る尊大な欲望でしかなく、人類が、他の生物種から天然痘や梅毒のように根絶を祈願されたとしても、かかる人類殲滅の野望は、人間がこれら己の敵に対してもっている憎悪と、本質的には寸分の違いもないといいうるだろう。その他倫理的基準なるものを支えているとされる概念、たとえば「個人の意思」や「社会的コンセンサス」などが、その美名にもかかわらず、虚構性をもっていることは、少しく考えてみれば明らかである。主体となる「個人」など、確固としたものであるはずがなく、その判断が、時と場合によって、いかに動揺し変化するかは、誰しもが経験することであり、そもそも「個人の意思」を書面で残して「意思表明」とするということ自体、かかる「意思」なるものの可変性をまざまざと表している。また「コンセンサス」づくりの「公聴会」なるものが権力関係の追認でしかないことは、私たち自身、いやというほど繰り返し経験していることではなかろうか。

かなりニヒリスティックな論調になってきたね。キーワードは、「虚構性」のようだ。人間が判断の根拠としているものは、どれもこれも「虚構」だ。

⑪ だが、行為を導くものの虚構性の指摘が、それに従っている人間の愚かさの摘発に留まるならば、それはほとんど意味もないことだろう。虚構とは、むしろ人間の行為、いや生全体に不可避的に関わるものである。人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚構を紡ぎ出すことによって己を支えているといってもよい。問題は、テクノロジーの発展において、虚構のあり方が大きく変わったところにある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによって、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質を余儀なくさせた。それは、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然」に任すことができた状況を人為の範囲に落とし込み、これに呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。そういう意味で**読解問題2**テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

とはいえ、「虚構」に従って行為している人間ってお馬鹿さんだよね、という話ではない、という流れ。「人間は、虚構とともに生きる」ものなんだ、という認識が示される。

これもある意味常識だ。ここでの「虚構」は、「物語」とか「幻想」とか、論者によっていろいろな表現が使われるが、どれも人間ならではの、人間自身が「己を支える」ために創り出す観念のことをいっている。「皆には無限の可能性がある。それを努力によって開花させ、夢を実現しよう」みたいな「虚構（ストーリー）」はおなじみのものだろう。学校教育などは、そのストーリーに沿って構成されていると言ってよい。が、たんにそれを「どうせ、虚構じゃん」と切って捨てた途端、私たちは自分の日々の行為を支える何ものかを失ってしまう。「どうせおれなんか」といっているうちに、ほんとうにあったはずの可能性の芽も殺してしまう。現実をまっすぐに認識することと、「虚構」「物語」「夢」「幻想」「神話」を創出して行為することの間で私たちは生きている。それが、〈文化〉っていうやつ。人間って、やっかいでおもしろいものだね。

さて、「問題は、テクノロジーの発展において、虚構のあり方が大きく変わったところにある」。これが筆者の論。技術の発展が、虚構の作り方に影響した？　例えば？

例えば、人間には等しく可能性が（神から）付与されている、といった近代的な「神話」について考えてみよう。ここに、先に挙げられていた「出生前診断」や「ゲノム解析」のような、「個体の未来を予言する」技術が現れたとしよう。それまでは、自分の未来については、神のみぞ知る、自分にはわからないことであった。そのわからなさの前提の中で、「（よき）可能性」という根拠も信じられていたわけだ。しかし、生命技術の発達は、その個体の身体的な未来を一定の確率で予言してしまう。知ってしまったがために、「無限の可能性」を素朴に信じることはできなくなる。すると今度は、どうなるだろう。予言された未来を変えることができる、という別の虚構が要求されるだろう。もちろん、そこには別の技術が関わらなくてはならない。「技術」が「虚構」を壊し、新たな「虚構」を要求する。

読解問題2　「テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう」とはどのようなことか。

☆**傍線部を延長**すると、「そういう意味で」とあるから、その指示内容に注目すればいい。指示内容の整頓問題。もう一つ、「テクノロジーは、／人間的生のあり方を、／その根本のところから変えてしまう」という各部分をいいかえるという視点を持って（☆**切り身の方法**）。

直前の、この部分を分析しよう。

「①テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによって、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質を余儀なくさせた。②それ（テクノロジー）は、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然」に任すことができた状況を人為の範囲に落とし込み、これに呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。」

「それまで」と「テクノロジー」の影響が顕著になってからの変化とは？　このように

問い直して整理していこう。

「それまで」は、人間は、虚構を虚構と思わず、確かなものとしてそれに即して自らを律してきた。これが虚構を根拠に生きるという人間の生のあり方。

「テクノロジー」は、確かなものとしての虚構を無効にし、その上、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態について、人間に判断を強いるようになり、その判断の根拠となる新たな虚構の産出をも強いるようになった。

【解答例】人間は、虚構を自ら創り出し、それを虚構と思わずにそれに従うことによって生を支えるという生のあり方を持っているが、技術の発達は、人間が従ってきた虚構を無効にし、その上、不可能であったから判断の必要がなかった事態について、人間に判断を強い、その判断の根拠とすべき新たな虚構を生み出すことをも強いることになった、ということ。

書いてみるとよりはっきりするが、「それまで」は、人間は「神話」をじっくり作り上げてきたのだといえる。環境が強いる「問題」は、常に存在しただろうが、そこに適応していくためのさまざまな「神話」が行為の是非を決める根拠となっていたはずだ。現在起きている変化の焦点は、やはり今も、強いられた判断の根拠となる虚構を、われわれは必要とするのだが、それは先祖から受け継いだ「神話」というようなものではないし、もしかしたら、技術の急進的な変化によって、数年後には無効になるかもしれないような虚構なのである。この慌ただしさの中で、人間は確かさを見失う。かといって、虚構が不要になることは、人間である限り、ない。

⑫　このようにテクノロジーは、人間の力を拡大すると同時に、条件が与えられれば答えが出てくるという式では処理しえない次元の問題領域、それ自体最終解決などない領域をも一気に押し拡げ、その解決のための新たな虚構を産出させる、そうした歴史的現象である。テクノロジーの展開は、歴史的にいえば、近代化の過程でもある。それがもたらす人間能力の拡大と未知の実践的問題の出現という事態は、人間的行為の地盤を流動化させずにはおかないものであった。本質的には、それ自体虚構的なものであったとしても、かつて安定していた行為の指針は、近代化・テクノロジー化とともに、実際にも激しく変動してきたのであり、それに代わる形で多様な神話的虚構が産出されることも同時に起こった。

ここまでのまとめのようになっている段落。図式化しておくのもいい。

かつて安定していた行為の指針（神話・虚構）――近代化・テクノロジー化とともに、激しく変動、多様な神話的虚構が産出。

冒頭の浜岡原発再稼働へと向けて中部電力が掲げた「エネルギーの安定供給」は、現在の政財界も、またそれを支えている市民層も思い描いている消費社会のイメージに資するものだろうが、これも一つの虚構でしかないことには、別な可能性として提案される「持続可能な社会」の理想の場合と同様、疑いを入れない。かつて科学技術による人間的生の変化を「脱魔術化（Entzauberung）」と規定したマックス・ウェーバーが、その結果生ずる価値観・世界観の競合状態を指していった「神々の永遠の争い」は、今も**読解問題3**私たちの根本的状況である。

「エネルギーの安定供給」も「持続可能な社会」も、虚構である！　私たちの時代の虚構は、このようなスローガンの形をとるのかもしれない。

この筆者は、やっぱりかなりペシミスティック。ただ、この「根本状況」に真向きに向き合う強さを持つことからしか、道は開かれないだろう。

読解問題3　「私たちの根本的状況」とはどのような状況か。

まず言葉どおりに等置するなら、

「かつて科学技術による人間的生の変化を「脱魔術化」と規定したマックス・ウェーバーが、その結果生ずる価値観・世界観の競合状態を指していった「神々の永遠の争い」になっている状況。」

これを解きほぐせばいい。

文末は「その結果生ずる価値観・世界観の競合状態」。

「その結果」とは、「科学技術による人間的生の変化（脱魔術化）の結果」。

☆とりあえず組み立てれば、

「科学技術による人間的生の変化（脱魔術化）の結果生じている、様々な価値観・世界観が競合している状況。」

☆とりあえず組み立てる、というのも一つのスキルだ。言葉どおり、部品を組み立てる。組み立ててから、眺めなおすと、補足すべきところも見えてくる。形が一応できあがっているので、安心感がある。

どの程度詳しく書くかはいつも迷うところかもしれないが、①答案スペースと②設問の意図、に添って分量を判断する。この問いは、入試問題なら、「本文全体の主旨をふまえ」といった注文がつきそうな問い。三問のうち、最後、また、文章の終わり、筆者のいいたいことのまとめを要求されていると受け取ろう。

「科学技術による人間的生の変化」は、すでに検討した。一方、「脱魔術化」と「神々の永遠の争い」は、初めて出てくる。新たに説明が要求されていると考えなければならない。

ここで、神話の時代／近代（技術の時代）、という対比が本文の中心に走っていたことを思い起こそう。

本文では直接書かれていないが、「魔術」と表現されているのは、近代科学、近代技術が生まれる前の、「神話」に基づく行為のことだと推定できる。山が火を噴き、地震が起

きる。山や大地は神である。雨が降らない。それは龍神の祟りである。これらは、近代以前、長い時間かかってその土地土地で形成されてきた「世界観・価値観」の一つだ。科学（近代）の目から見れば、迷信盲信であり、虚構だということになる。

それが近代になり、科学技術が発展し、現在の、目もくらむような技術の加速度的進歩につながっていく。⑫段落で取り出した図式を参照すれば、「かつて（比較的）安定していた行為の指針（神話・虚構）」が「近代化・テクノロジー化の進展とともに、激しく変動し続け、多様な神話的虚構が次々生まれている」という状況だ。

多様な虚構の例が、「エネルギーの安定供給」や「持続可能な社会」だった。この具体例を通して考えてもわかるが、「原発を再稼働する」という判断のために呼び出されている「エネルギーの安定供給」という神話（かつては「原発の安全神話」というのも存在した）と地球環境と経済システムを同時に保持するという行為のために呼び出されている「持続可能な社会」という神話は、ある面で対立する。「持続可能な社会」という価値観に立脚する言説は、原発を否定する可能性が高い。

【解答例1】近代以前、自然環境など、どうすることもできない事態の中で、人間は自らの行為の根拠として神話や魔術を創出してきた。しかし、近代以後、人間はかつての安定していた行為の指針を放棄し、技術がもたらす新たな判断に対応するため、次々と様々な価値観や世界観を生み出し、それらが互いに不安定に競合している状態だということ。

【解答例2】人間は、かつて風土の影響下で形成されてきた神話を行為の指針としてきたが、近代以後、進化する技術が強いる新たな判断に対応するため、かつての神話に代わり、多様な価値観や世界観が生み出され、新たな神話として競合している状態。

■**読解問題**

1　「行為者としての人間を放擲する」とはどのようなことか。

2　「テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう」とはどのようなことか。

3　「私たちの根本的状況」とはどのような状況か。

■**発展問題**

●虚構とはいいながら、人間にはそれがなくては判断の根拠がない。今後の技術の進展に際して、どのようにこの虚構に向き合えばいいのか、その可能性や課題について論じなさい。

●重要語「虚構」＝フィクション。「つくりごと」と置き換えて読もう。「明確な根拠がないこと」「人間が勝手に線引きして作ったもの」というニュアンスで使われることが多い。